



Title	スノッリとサクソにみるバルドル神話
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 1982, 6, p. 3-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スノッリとサクソにみるバルドル神話

菅 原 邦 城

I. スノッリとサクソ

今日知られている中世北欧の代表的文人として、アイスランド人スノッリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson, 1179—1241) とデンマーク人サクソ (Saxo Grammaticus) を挙げることに、さして異論はなかろう。スノッリについては筆者も本誌で何度か触れてきたし、また中世北欧文学関係の出版物では必ず取り上げられる人物であるから、ここでは繰り返すことはしない。しかし本稿の関連上、彼が北欧神話の文献として重要な、いわゆる散文の『エッダ』と「ユングリング・サガ」(等を含む、ノルウェー諸王のサガ『ヘイムスクリングラ』) の作者であることを指摘しておく必要はある。

一方、上記『ヘイムスクリングラ』に匹敵するデンマーク諸王年代記『デーン人の事蹟』の作者であるサクソについては、正確に知られることは何一つない。その生没年とて例外ではない。確かなことは、彼がスノッリよりも1世代ほどはやく生まれたこと、デンマークで国王を補佐して聖俗両界に勢威をはった権勢家、そしてコペンハーゲンの開祖でもある大司教アブサロン(約1128—1201)の側近の1人であったこと、熱烈な愛国主義者で反ドイツ的、反宮廷文化的傾向の持主であったことぐらいである。今になって大いに悔まれることは、武人として国王に仕えた祖父と父のゆえにサクソ自身はあえて自己紹介の必要を認めず⁽¹⁾、このために後世に対して自らを無名の存在にしてしまったことである。彼の綽名 grammaticus(「名文家」ほどの意)は、1342年成立の文献にはじめて現れるが、これは、のちにオランダの人文主義者エラスムスが高く評価したように、彼の

卓越したラテン語の能力に対する称賛である。その作品『デン人（デン人）の事蹟』は、古いデンマーク（及び北欧）の社会、思潮などを考察するのに興味つきない資料であって、その方面に関心を抱く者には必須の文献である。いまはしかしながら、詳しくは他書についていただく⁽²⁾。

本稿は、北欧神話における重大なテーマ、神 Baldr（サクソでは Balderus）殺害に関連して、スノッリ（などアイスランド及びノルウェーの⁽³⁾伝承）が殺害の首謀者と実行者としてそれぞれ Loki と Hǫðr を挙げるのに対して、サクソではホズ（彼の Hotherus, Høtherus）だけとされて、ロキが全く見当らないことに、ヒントを得たものである。

問題にすぐ入るまえに、これら中世北欧人がキリスト教を知らなかった祖先たちの神々をいかに見たか、また上記の出来事をいかに伝えているかを、彼ら自身の作品に即して確認しておこう。

II. スノッリとサクソの異教神観

中世ヨーロッパは周知のように、キリスト教を唯一の宗教とした社会であり、その他の信仰形態は少なくとも公けにはその存在を許されなかった。キリスト教教会が、キリスト教以前にヨーロッパ人が信じていた神々（例えばギリシア・ローマの）を弾じるのに用いた考えの代表的なものは、いわゆるエウヘメリズム、エウヘメロス論である。この考えは、紀元前4世紀のギリシア人エウヘメロスにちなむもので、彼によれば、顕著な功績によって国民的英雄にたてまつられた人間があやまって神格化され、神として崇拜されたのである。教会はこの論をさらに進めて、かような神神とは真実の神にあらずして悪魔、サタンであるとした。その公式見解が、キリスト教世界に生をうけ、その教会教育を授けられた知識人たるスノッリやサクソによっても継承されていることは、容易に想像され、ほぼ疑いの余地のないところである。

1. スノッリ

スノッリの『エッダ』(1220年頃成立)の冒頭にある「序文」は聖書と古典古代の素養を披瀝しているが、そこに認められるスノッリの説明は、おおよそ次のようになる(*Edda*, Prologus 2—5)。

世界は地中海を中心としてアフリカ、エウローパないしエネア、そしてアシアの3地方に分けられ、その中でもっとも豊かなのはアシアである。ここは他のどこよりも、大地は美しく、住んでいる人間も智慧と力、美と知識をもっともよく具えもっている。アシアで、世界の中央近く、テュルクランド(現実には、セルジュク・トルコの支配した小アジア)にトロージャ(Trója)という地があり、そこでは1人の大王のもとに12の王国があった。その中にムーノーンないしメンノーンという王がおり、彼はブリーアムス王の娘との間に息子トロール(Trór)をもうけ、これは北欧人がソール(Pórr)と呼ぶ人物である。彼は12歳にして一人前の力を持ち、養父母を殺害してトラキア(Trakía)王国を奪った。この王国を北欧人はスルーズヘイム(北欧神話ではソールの住居)と呼んでいる。絶世の美女シービル(Síbil)、北欧人のいうシフ(Sif)がソールの妻となった。ソールの18代目の後裔がオージン(Óðinn)であり、彼は智慧とあらゆる能力のゆえに名高い。彼の妻はフリーギーザ(Frígíða)、つまり北欧人のいうフリッグ(Frigg)であった。

オージンはその予言力によって、自分が世界の北方(ヨーロッパ)においていかなる王よりも高く崇められることを知り、そこへの移住を実行する。はるばる来たったサックスランド(ドイツ、ことに北部)でオージンは息子3人と共にこの国をわがものとする。息子の1人⁽⁴⁾はベルデグ(Beldeg)というが、彼は北欧人にバルドル(Baldr)と呼ばれ、ヴェストヴァル(おそらくヴェストファーレン)を領有した。オージンはさらに北進してデンマークに至り、これを息子スキョ

ルドにあてがい、自らはスウェーデンに赴いた。この頃オージンの一党は、アースたち(æsir)つまりアシア人たち(Asíamenn)と呼ばれるようになっていた。彼らの行く先々が豊作と平和に恵まれたとかで、スウェーデン王ギュルヴィはオージンに対して、自分の王国で好きなだけ権力を有するよう申し出た。オージンはこうして、今日シグトゥーナと呼ばれる地に、いわば新トロイヤを建設することになった。ノルウェーとスウェーデンの支配王家も彼から発している。

学校教育によって得た知識に⁽⁵⁾ 西部北欧神話を調和させたとされる、この「序文」のあとに、『エッダ』の第一部「ギュルヴィのまどわし」が続く。そこでは、上述の(とおそらく同じ)スウェーデン王ギュルヴィが旅人に変装してアースたちを訪れて、彼ら3人の王——ハール「高き者」、ヤヴンハール「等しく高き者」、スリジ「第三の者」と称されるオージンの3分身——に宇宙のことどもについて知識を尋ね求める。ギュルヴィは、アースたちの館に入る前にすでに彼らによって「まどわし」(眩惑)をかけられていたが、しまいには、世界の滅亡とその再生をめぐる問答を終ったとき、アースたちの館の中にいるとばかり思っていたのに、実際は⁽⁶⁾ 大空の下、平原にただ一人とり残されていることを知るのであった。彼はそれから自分の国に戻って、見聞した(と思った)ことを言いひろめることになる。

「一方、アースたちは話し合い相談した。彼らはいま(ギュルヴィに)物語られたこれらの話すべてを想い起こし、その中にあった人物と場所に、前に(話しの中で)つけられたこれらの同じ名を(改めて)つけた。それは、長い時がすぎ去ったとき、いま(ギュルヴィに)物語られたアースたちが果して、同じ名をつけられたこれらのアースたちと同じなのだろうか、と、人びとが疑いをもたないようにするためであった。」(Gylfaginning 54)

かくして——スノッリの筆法にしたがえば——古代の北欧人はうまうまとアースたちのまどわしにかかり、神ならぬアシア人たちを神として長

く信じることになった。そして「ギュルヴィのまどわし」を読む我々とは
いえば、アースならぬスノッリによって、彼の物語るアースたちのことを
思わず知らず神であるかのように思いこませられていくのである。

『エッダ』第二部「詩語法」の途中に、いわゆる「結語」(Eptirmáli)
が挿入されており、ここでスノッリは直接呼びかけている (Skáldskapar-
mál 8)。

「さて、今度は若い詩人、すなわち詩のことばを習得し、古い名称（ヘ
イティ）の貯えをわがものとするを切望する者、あるいは詩に秘めら
れている事柄を理解することを切望する者に、彼は知識と娯楽のために本
書を吟味すべきであると言われねばならない。（中略）しかし、キリスト
教徒は異教の神々を信じてはならぬし、またこれらの物語の真実性を本書
冒頭（「序文」）に見られるのとは別様に信じてはならない。」

つまりスノッリはよきキリスト教徒として後輩に対し、詩を作るのに必
要な古代の知識を身につけることを勧めると同時に、その内容を真実視し
て正しい信仰の道を踏みはずしはせぬように忠告したのである。この言は
また、詩人スノッリ自身が決して異教信者などではないことを、暗に弁明
するものでもあろう。

スノッリの『エッダ』は、以上のような用心深い断りを含みながらも、
全篇を通じほぼ一貫してアースたちを神として神話物語りを展開すること
に成功している。これに対して、同じスノッリの大作『ヘイムスクリング
ラ』（1230年頃成立）の第一部をなす「ユングリング・サガ」中のアシー
ア人はアジア渡来の人間で終始する。それでもサガは実質的に、『エッダ』
の「序文」に見られるのと同じ知識を示している (Ynglings saga 1ff.)。

ドン河 (Tanais, 正真正銘のラテン語でもある) の東にアーサラン
ドあるいはアーサヘイムがあり、その都はアースガルズと呼ばれ、こ
この支配者はオージンと称した。彼は予言力のおかげで、子孫が世界
の北部（ヨーロッパ）に住むようになろうことを知り、アースガルズ
を兄弟に委ねて、自身は国を去る。最後に、ギュルヴィ王の支配する

肥沃なスウェーデンに向い、ギルヴィを破って、シグトゥーナに新たなアースガルズを建設した。オージンがスウェーデンで病没したとき、「スウェーデン人たちは、彼はいにしえのアースガルズ（地上の都というよりも天上界か？）にいたって、そこで永遠に生きるだろうと考えた。このとき新たに、オージンに対する信仰と祈願が始まった。」(Ynglinga saga 9)

こうしてスノッリは、かつてドン河のかなたから発した人間の王オージンがスウェーデン人たちによって神と崇められるようになったと、明言するのである。

『エッダ』のアースたちは自ら神を 僭称させられている。これに対して、「ユングリング・サガ」のオージンは彼の熱心な支持者たちによって神格化された。これらはいずれもエウヘメロス論の主張とみなすことができる。そして、先述の説明にしたがうならば、後者の主張が一層オーソドックスな考えといえる。

2. サクソ

サクソの年代記は、神々を中心に据えたものではないので、上にみたスノッリの諸作、ことに『エッダ』ほどにまとまった異教神観を示していないことは致し方ない。サクソによれば (*Gesta Danorum*, Liber primus V 2—5),

かつて魔法使い（マテマティクス）には3種類があった。第一は体格で人間をはるかに凌ぐ「巨人」と呼ばれた。第二は、体格こそ巨人に劣るものの、自然の諸法則に精通して神託のような予言の能力に恵まれた種族であった。この二種族が混じって第三の種族が生じたが、これは力の点では巨人に、魔法の点では第二の種族に劣っている。しかしそれでも、魔術によって人間を惑わし、神としての名声を獲得した（“divinitatis accessit opinio”）。

具体的には、「魔法に精通せし者たち、すなわちトール (=ソール)、オーティヌス (=オージン)、その他多くの者が仕掛けによって不思議な錯覚を生ぜしめるのに巧みで、単純な人々の心を曇らせ、神の高位をわがものとし始めた。(中略)彼ら(北欧の諸国民)は魔法使いの輩に厳かな祈りを捧げ、聖なる教えに帰すべき敬意をあやまって邪教に示した。」(Liber sextus V 3)。「聡明なローマ人でさえ、同様の死すべき者たちに神の名誉を捧げてこれを崇拝するに至らしめられているとき、たとえ(北欧の)野蕃人たちが彼ら(上述の第三の種族)の奇妙な仕業によって偽りの宗教の礼拝に陥ったとしても、驚くに値しない。」(Liber tertius V 6)。帝政時代にローマ人たちが皇帝を神格化したことは周知の通りであり、その最初の例が、サクソも語っているように(Liber sextus I 2)、「神なるユリウス」カエサルであった。

サクソは自身もその作品において、魔法使いを便宜的に神よばわりするとき、「我々は本来的というよりもむしろ推量から神々と呼ぶのである。つまり本質からしてではなく国民の習慣上、彼らに神の名称を与えている」(Liber tertius II 10)ためであり、祖先の崇拝していたものは神では決してなかったと、強調する。そんな<神々>——及びこれを崇拝した祖先たち——にとっては、主神オーティヌス (=オージン)を追放して素姓の不明な者をその後釜に据えたごとく、「神をつくることと王をつくることとが、あたかも等しいものであるかのようであった。」(同上 IV 10)。

以上のサクソのことばから、彼がスノッリと同一の異教神観に立っていたことが明らかになる。

III. バルドル神話

一般に北欧神話といわれるものは、エッダ詩集(とりわけ「巫女の予言」「ヴァフスルーズニルの歌」「グリームニルの歌」)とスノッリの『エッダ』に伝えられる資料によっていることが多い(それゆえに「エッダ神話」

とも称しうる)。この神話体系にあって、世界の運命に大きな転換——宇宙の滅亡に向う急傾斜の開始——をもたらす出来事は、主神オージンとその妃フリッグの愛児バルドルが殺害されることである。このバルドルは、既述のように、サクソではバルデルスとして現れ、そこでもやはり彼の死が物語られている。バルデルスの死こそ、サクソが自作中に残した最大にしてももっとも問題の多い神話的事件なのである。

以下に、このバルドル (=バルデルス) をめぐる 唯一の神話について、スノッリの「ギュルヴィのまどわし」を中心とするエッダ神話、それからサクソの異版を要約する。

1. スノッリ異版

まず、バルドル神に関するスノッリの特徴づけは、理想像のそれである。つまり、「彼はもっとも優れており、だれもが称える。その容貌はたいそう美しく輝いており、それは彼から光が発しているほどだ。(中略) 彼はアースの中でもっとも賢く、もっとも雄弁で、もっとも憐みぶかい。その裁きのどれ一つとして不正なことはありえないという性質がある。」(Gylfaginning 22)。この無疵の青年神について我々に残されている神話は、その死をめぐるものだけである (Gylfaginning 49)。

バルドルは悪夢に見舞われ、死におびやかされる。アース神たちはその予防策について相談し、母神フリッグが命あるもの、命なきもののすべてに、バルドルの命を危うくしないことを誓わせた。この結果、バルドルは矢を射かけられても、石を投げつけられても傷一つ負わない。ところが、バルドルが一見不死の身となったことを面白くなく思う者があった。それはロキ神である。彼は老婆に身をやつして神妃フリッグを訪れ、彼女があらゆるものから誓約をとったのではなかったことを聞き出す。主神の館近くに1本のヤドリ木があった。これは誓いを要求するには余りにも若いと、フリッグは考えていたのである。ロキは早速にその若木をとって、神々がバルドルを標的にして遊

び戯れている場に現れた。そこでは人垣の外に、オージンの息子で盲目の神ホズが一人はなれて立っている。これにロキはヤドリ木を手渡して、自分がバルドルに向けて的をきめてやって投げつけさせる。ホズの手を離れた若木は矢となってバルドルを貫き、こうしてバルドルは大地に倒れて息絶えた。

このあとに、バルドルの葬儀、バルドルを冥府から生き還らす努力と再びロキの妨害による失敗、オージンが女巨人リンド（Rindr）に産ませた息子ヴァーリ（Váli）によるバルドルの仇討ち——つまり同時に新たな肉親殺害（？）——が続く。

バルドルの死をめぐる神話は、上にみたスノッリのほか、エッダ詩集の神話詩中最も重要な一作「巫女の予言」（10世紀後期成立か）でも言及されている（Völuspá 31—33）——

「巫女は見ぬ、バルドル／傷おしい神／オージンのいとし子のため／定められし命を。／原より高く／大きく育ち／ほっそりと、げに美しく／ヤドリ木は立ちてありき。

ほっそり見えし／かの木から／危うき悲しみの矢がつくられて、／この矢をホズが投げ射たり。／バルドルの弟すぐ生まれ、／オージンの子なる弟（ヴァーリ）／生まれてわづか一夜にて／戦うことをはじめたり。

弟神は手を洗うも／髪をとかすもなさざりき、／バルドルの仇（ホズ）を／葬いの積み薪にのぼせしまでに。／されどフリッグはフェンサリルの／館にてヴァルホルの／まがごと（バルドルの死）嘆き、泣きくれぬ。
（1行略）

また、その成立時期については諸説あるが、全体の傾向と内容からは比較的新しい作品と推測できる——キリスト教到来以降のいずれかの時点に成立した——エッダ詩「ロキの口論」の中に、バルドル殺害にロキがかかわったことをほのめかす1節が認められる（Lokasenna 28）——

「あなたは望むのか、フリッグよ、／私（ロキ）が聞くにつらい言葉を／もっと並べたてるのを。／この私が、あなたが二度とふたたび／あなた

の館にバルドルが馬のりつけるのを／見られぬようにした。」

バルドルの悪夢の直後を叙述する他のエッダ詩「バルドルの夢」の中で、父神オージンは彼岸に赴いて、魔法にたけた巫女をその死の眠りから喚びおこして、彼女にバルドルの殺害者（ホズ）とその復讐者（ヴァーリ）のことを聞き出している。しかし、この詩はロキについては何も語らない。復讐者ヴァーリのことは、「ヒュンドラの歌」でも語られている（Hyndluljóð 29）。なお、バルドルの死を暗示するものとして、他のエッダ詩1節も知られている（Vafþrúðnismál 54）。

2. サクソ異版

サクソはエウヘメロス論にのっとって、祖先たちとは反対に、古い神々を人間化して、バルデルスの死を物語る（*Gesta Danorum*, Liber tertius I 1—III 7）。（しかしながら、既に見、また後に再び見るように、サクソによる神々の人間化は徹底していなかった。）

スウェーデンの王子ホテルスは父の死後ゲヴァルス（Gevarus）王に養育されていた。成長してその武勇と音楽の天才のゆえに彼は、王の娘ナンナ（Nanna、エッダ神話におけるバルドルの妻と同名）に慕われる。このナンナが沐浴する場を垣間見てバルデルスが、彼女に対する激しい情欲にとらわれた。彼は神の胤によって生まれた半神であった。バルデルスは、武力をもってゲヴァルスに娘を与えるよう強要する。養子と娘との仲を知るゲヴァルスは、神力に対する恐れとわが子らへの情との間で心が定まらない。結局、娘にじかに気持を確かめるようにと、バルデルスに告げて言い逃れる。ナンナの方はことば巧みに、神と人との違いの大きすぎることを理由に、半神の求婚を断った。

「高貴の方々のそばですと賤しい者どもの境遇はつねに価値なきものとなりますので、異質の者同士の結びつきは長続きもしませんゆえ。」（Liber tertius II 9）

求婚者たちは 中途半端な 現状に結着をつけるべく、海戦に衝突する。バルデルスは父オーティヌス、無敵の棍棒をふるうトール等、神軍の加勢を得て、ホテルス側をいまにも倒さんばかりであったが、トールの棍棒の柄が切り落されて使用不能になったとき、ホテルスの勝利が決まった。この勝利によってホテルスはナンナをめとり、スウェーデン王位にも即く。

間もなくバルデルスが戦いを挑んで、今度はホテルスが敗走の憂き目を見る。しかしバルデルスは、勝利したもの、ナンナは相変らず他人の手にあり、彼女への熱い思いに悩まされて、ついには歩くこともままならなくなり、絶命の一步手前にいたった。(これ以後、ナンナへの言及なし。) 半神バルデルスと亡命王ホテルスは、その頃支配者を欠いていたデンマークの王位を争って、3度目の戦いに矛を交え、再びバルデルスの勝利に終わった。

二人の間で行なわれた4度目の戦いが最後の戦いとなった。初日は夕闇まで両軍互角に戦った。夜間に敵軍偵察にしのび出たおりに、ホテルスはニンフ（北欧本来の伝承に直せば、ヴァルキュリヤ）から助言と勝利のベルトを授けられた。これが幸いしたのであろう、ホテルスは魔法の剣でバルデルスに瀕死の重傷を負わせることができた。バルデルスはこの傷がもとで3日後に死ぬ。

エッダ神話同様サクソにあっても、バルデルスは父親にとって愛児であったと思われる。

父親オーティヌスはわが子の復讐を果すべく、予言者、占い師らに助言を求める。そして自分が、ルテニア（ロシア）の王女リンダ（Rinda, エッダ神話の女巨人 Rindr と同一視してよかろう、上段参照）によってバルデルスの復讐実行者をもうけることを知った。その後、老魔法使いオーティヌスは力の限りをつくしてリンダをわがものにせんとするが、その努力はことごとく水泡に帰する。ようやく、王女が病床にあって無抵抗だったときに、女医者に変装して思いをとげ

るのであった。⁽⁷⁾別伝では、ルテニア王が、王女を得たいばかりに尋常ならざる功績を数々あげてくれる オーティヌスの思い悩みを見かねて、娘と床を共にさせてやったとも、いわれる (Liber tertius IV 1—8)。

こうして、復讐者ボーウス (Bous) が生まれて、異母兄バルデルスの仇をホテルスに討ち、ボーウス自身も手負いがもとで翌日死にはてることになる (同上 IV 13, 15)。

以上に要約したスノッリ (及びエッダ詩集) とサクソの叙述を比べると、各種の相違点が数えあげられよう。例えば、ホズ=ホテルスとバルドル=バルデルス間の血縁関係の有無、スノッリ異版とは対照的にサクソ異版にあって重要な要因をなすナンナの配偶者が両異版で逆になっていること、バルドル殺害の起因がスノッリではロキのいらだちと悪意であり、サクソではバルデルスのナンナに対する横恋慕であること、バルドル=バルデルスの復讐実行者の名が一方ではヴァーリ、他方ではボーウスであること。しかし、もっとも著しい違いは、ホズ=ホテルスに付された性格、そしてこれと密接に結びつく次の点であろう。つまり、スノッリ異版では単なる殺人実行者 (handbani) にすぎないホズをそそのかす、殺人の計画者 (ráðbani) としてロキが重要な位置を占めているのに対して、サクソ異版にはロキなる者が全く登場しないことである。

IV. ディスカッション

いま最後に指摘した、バルドル神話に関するスノッリ、サクソ両異版間最大の相違点をいかに解釈すべきかについては、従来いくつかの説が唱えられている。主な説を挙げれば、次のようになろう。

第一の説は、サクソの利用した (あるいは、利用できた) 資料はデンマーク (あるいは、スウェーデンも含む北欧東部) の地方伝承で、これには

ロキが全然関係なかったとする。これは、もっとも考えられうる説と見なされている。⁽⁸⁾ ちなみに、この説は一見したところ、エッダ詩「バルドルの夢」に語られる内容と同じ基盤に立っていると思われそうである（前出 III.1 参照）。第二の説としては、「ホズのサガ」(Haðar saga) なる作品により、サクソがこのサガをラテン語で語り直したことが主張される。⁽⁹⁾ この仮定されたサガは、現実には存在していない。第三の説は、ロキが別の名でサクソ伝承に現れているとする。⁽¹⁰⁾ それは、バルデルスの養父で、ナンナの父でもあるゲヴァルスと推測されている。たしかにゲヴァルスはホテルスに、神をも倒す魔法の剣——ヤドリ木にあらず！——を森の精（サチュルス）から奪うことを勧め、その奪取法を教えている（*Gesta Danorum*, Liber tertius II 5—6）。

これらの説はいずれも未だ定説となりえていない。そこで筆者はあえて、おそらく新たな、そしてきわめて単純な考えを提案しようと思うのである。考えの主要な前提として、スノッリとサクソは同一の神話を伝えていること、これと関連して、サクソは利用できた情報の多くをアイスランド人に依存したであろうこと、を挙げておかねばならない。後者についてはサクソ自身、アイスランド人が他国民の熟しを自らのもののごとく記録することに高い価値を置いており、「私は、彼らの歴史の出来事の証拠に満ち満ちた宝ぐらを精査し、そして彼らの物語をうつすことによって本書の相当部分を (haud parvam partem) まとめた」(*Gesta Danorum*, Præfatio I 4) と率直に述べている。これは詳述する紙幅はないが、サクソが語っている多数の伝説が、今なお知られているアイスランド中世のサガ諸作に大なり小なり類似の形で残されていることから、納得できる叙述である。⁽¹¹⁾ この事実とはまた、第一の前提を間接的に支持するであろう。さらに筆者の推論は、サクソの異教に対する全般的な見方、あるいはむしろ彼の感情と呼ぶべきものを主な根拠とする。具体的には、バルドル=バルデルス、ホズ=ホテルス、そしてロキがそれぞれの異版にあっていかなる特徴を付与されているか、を点検することから始める。

1. バルドル=バルデルス

a. バルドル（スノッリ異版）

バルドルについてはよいことしか言われたいとするスノッリによれば、彼は「容貌がたいそうすぐれ、また輝いている」「アースたちの中でもっとも賢く、もっとも雄弁」「もっとも憐みぶかく」「その裁きのどれ一つとして不公正なことはありえない」（以上 *Edda*, *Gylfaginning* 22; cf. *Skáldskaparmál* 4）。母フリッグがヤドリ木以外のものすべてから誓約を得てしばらくの間バルドルは不死の身であり、そして突然起こった彼の死は、神々にとって取り返しのつかない損失となっている（*Gylfaginning* 49）。エッダ詩集にも、バルドルがすぐれた神であることを示唆する表現が認められる（*Grímnismál* 12, *Lokasenna* 27）。こうしてエッダ神話中のバルドルは、*Baldr inn góði* とも称されるように、善、正義を体現するかのようである。

b. バルデルス（サクソ異版）

「神の胤から生まれた半神」（*Gesta Danorum*, *Liber tertius* II 4）バルデルスの容姿について、具体的には何も語られていない。彼の「肉体は金属に対しても不動の神聖な力を持っている」（同上 II 5）。またその力は「常ならず甘美な食物」（同上 III 4）に依存していた。これらの叙述は、神なる存在について多分に観念的、ステレオタイプの印象を与える。バルデルスは既に述べたように、沐浴する王女ナンナを垣間見てこれに激しい欲情を覚え、その実現にとって妨げとなる、ナンナの恋人ホテルスを武力によって排除しようと決心した（*Liber tertius* II 3）。ここに我々は、自己の好色のために是が非でも我意を通そうとする＜神＞の邪心を見る（あるいはむしろ、見ることを余儀なくされる）。

2. ホズ=ホテルス

a. ホズ（スノッリ異版）

ホズはバルドル殺しの張本人として、神々は彼のことはできるだけ言いたくないと、語られているが、ホズは「非常に強い」(Gylfaginning 28)「盲目の」(同上 28, 49)神である。エッダ諸詩中でも、バルドルと共に名を挙げられているものの (Völuspá 32, 62; Baldrs draumar 9), その性格などについては直接には何も語られていない。

b. ホテルス (サクソ異版)

半神に対抗し、ついにはこれを破る人間英雄とされるホテルスは、スノッリ異版のバルドルと比肩しうるほど肯定的に特徴づけられている。すでに「若者として彼はそのきわめて強堅な体格でもって養兄弟や同年輩の者たちを凌いだ。」「種々の技についての彼のその他の素質は言うまでもない。なぜなら彼は水泳、弓術、拳闘の熟知、熟練に彼の年輩が達しうる極致に到達したからである。」そして「豊かに恵まれた心でもって、自己の未成年をこえていた。」(以上 Liber tertius II 1)。彼のよどみなく甘美な雄弁はかたくなな人の心をも、彼の思う通りにできた(同上 II 8)。彼はまた、謀反によって倒されたゲヴァルスの復讐を果して遺児 2 名をノルウェー王位に即け、養子・義息そして義兄としての務めを全うした(同上 IV 14)。なお、青年ホテルスについて、各種の楽器に巧みで、人の心を自由自在にできるほどの腕前であったとも語られるが(同上 II 1)、これはサクソの時代に称賛された中世ヨーロッパ宮廷生活の文化的側面を反映する、副次的な添加であるに違いない。

3. ロ キ

既に述べたように、ロキはエッダ神話に登場して、サクソの作品には全く現れない。スノッリが要約的に語っているところによれば、ロキは「顔つきは立派で美しい」が、「心根は邪しま」で、「行動はひどく気まぐれ」「だれにもまして奸智という智恵をもっており、いつも騙す」。「彼はよくアースたちをはなはだしい困難にあわせた」が、「時には彼らを奸計でもって助けもした」(以上 Gylfaginning 33)。また「アースの陰口ききとか、偽り

の父とか、神々と人間すべての恥」(上掲箇所)とも呼ばれていた。これらは、主神オージンを別にすれば、ソールと並んでもっとも頻繁にロキに言及する両エッダにつくとき容易に見てとれる、「奸智にたけしロキ」(“inn lævisi Loki”: Hymiskviða 37, Lokasenna 54), 「禍いたくらむロキ」(“lægjarn Loki”: Völuspá 35)に似つかわしい行為であり、性格である。

4. 結 論

前段にまとめたスノッリとサクソによるホズ＝ホテルスとバルドル＝バルデルスをめぐる叙述は、極端なまでに対照的、対立的である。つまり、バルドルについてスノッリは、神の理想像として最高の評価を与えている。これに対して、サクソはバルデルスを倫理的に非難されるべき好色な半神で、このきわめて人間的な動機のゆえに人間と全く同様に争い、傷つきそして死ぬのだと言い切る。一方、ホズについてスノッリは最小限必要なことも語っていないかのようなのである。サクソは反対に、ホテルスを人間の理想像として口をきわめてほめ称えている。要するに、スノッリとサクソの問題の二神に対する評価は逆転しているのである。

先に前提としたように、スノッリ(あるいは北欧西部)の異版とサクソ(あるいは北欧東部)の異版とが同一の源にさかのぼり、そしておそらく後者が前者から発していたならば、我々が見ている両異版のきわだって対立的な叙述はいかに解釈されるべきであろうか。

既に説いたように、スノッリとサクソがもった異教神観は、中世キリスト教徒知識人に典型的なエウヘメロス論である。しかし、同種の観念によりながらも、両者の間には明白な相違が認められる。スノッリは若い詩人志願者に向って、自分が古い神々について語っていることは詩作上必要な知識であり、また娯楽の対象となりうるものであると注意している。そして彼自身は、「ギルグヴィのまどわし」のアースたちのように、ギルグヴィ王が見舞われたまどわしを読者にもかけて楽しむだけの余裕を示している。ここに我々は、祖先の——たとえ誤ったものであったにせよ——信仰

に対して寛大に接することのできる冷静な知識人を認めてよかろう。ただ、神々の具体的な扱い方でスノッリは異教のドグマをキリスト教的な観念によって修正し、中でもバルドル対ロキの関係をキリスト対サタンのそれにひき寄せた、と主張されている。⁽¹²⁾それはともかく、第三の異教神ホズが、ロキをクローズアップするスノッリ異版では全く影のうすい、受動的な存在にすぎないことは明らかである。しかしながらホズは、重要な韻文資料「巫女の予言」によれば、世界の滅亡ののち新しい世にバルドルらと共に蘇る重視されるべき神なのである（Völuspá 62; cf. Gylfaginning 53）。スノッリはたしかにホズを「非常に強い」神だと紹介しているものの、「戦士」と解義される彼の名にふさわしい神話を語ることができなかった。⁽¹³⁾少なくとも最後の点については、サクソの方が一層原初的な、＜すぐれた＞伝承を知っていた可能性がある。また、バルドルに関してもスノッリは、サクソとは逆に、これをきわめて受動的、静的な存在として描いている。このことは、ホズの場合と同様に文学伝統との間にずれを感じさせる。⁽¹⁴⁾いずれにせよ、スノッリのバルドルとサクソのホテルスの特質が酷似していることに、我々は注目せざるを得ない。

サクソは、スノッリが異教諸神にいわば余裕ある寛容を示したとするならば、これとは対照的に、極端に不寛容に、聖職者のごとく＜神々＞をさげすんでいるとされよう。⁽¹⁵⁾それがもっとも辛辣で徹底しているのが、ほかでもない、本稿で問題にしている個所においてなのである。つまり、サクソも「習慣上（more）」（*Gesta Danorum*, Liber tertius II 10）神と呼んでいる異教神たちは、巨人族と予言力に秀でた種族の混血種である（Liber primus V 5）ためか、「神格は一般に人間の援助なしには不完全である（“humanæ opis indiga est imperfecta divinitas”）」（Liber tertius IV 1）。それにもかかわらず、北欧の諸国民はこれらの魔法使いに欺かれて彼らを神として崇拜したのであった（Liber sextus V 3）。

サクソの異教神蔑視、神々敵視が意図的に徹底されたものであったならば、それだけ一層、異教徒の理想神であるバルドル＝バルデルスが否定的

な描写をされたことは自然である。そして、異教ドグマの中でこの理想神に対立させられた ホズ=ホテルスが、サクソによってバルドル=バルデルスに拮抗する力を与えられ（倫理的にはこれに優るものとされ）、最後にこれを打倒する役割を担わさせられたことも、納得できよう。仮にエッダ神話のロキがサクソにおけるゲヴァルスと同一であったにせよ、異教の、＜偽りの＞神と対立させる目的にとっては、異教でバルドル殺害の実行者とされる ホズ=ホテルスを強化する方が一層理屈に合う。そこでロキ=ゲヴァルス（？）に類似の任務を分担させることは、バルデルス——ホテルスの対立を弱め、不鮮明にただけであろう。換言すれば、エッダ神話のホズとロキの特性は、サクソにあっては邪神バルデルスに移しかえられ、エッダ神話の善神バルドルの徳性は同様に、サクソにおける英雄ホテルスに転じられたのである。

この推論が的外れでないならば、サクソが、自分は古い記録を文字通りラテン語に移すことを原則とした語る（*Præfatio* I 3）ことに、我々は無条件に従えなくなろう。

ロキについてはもはや論じる必要はなかろうが、ただ北欧東部の異教伝承はロキを知らなかったのだろうか。この間については、確証と呼びうるものが何一つ存在しない以上、いかなる答も可能であろう。しかし、資料らしきものとして我々は、ヴァイキング時代のイングランドから知られる刻画石碑をもっている。そこには縛められた人物が彫ってある。それらの中でも、カンブリア州ゴズフォースのセント・メアリー教会墓地の十字架（1000年頃のもの）に見られる彫刻は、バルドル殺害の後懲らしめを受けるロキと彼の妻シギュン（*Gylfaginning* 50; cf. *Lokasenna* 末尾散文）を描いていると主張されている。この地域はデンマーク人の支配地デーローに近いことを考えると、この主張は根拠のないものとしてむげには退けられない。そうであれば、デンマーク人の間にもロキを知る伝承がかつては存在していたかもしれない。

(1982.9.12)

注

本稿に用いた原典刊本は次のものである—

Jón Helgason (udg.): *Eddadigte* I. Völuspá, Hávamál. 2. udg. København, Oslo, Stockholm 1964.

Jón Helgason (udg.): *Eddadigte* II. Gudedigte. 3. udg. København etc. 1965.

Finnur Jónsson (udg.): *Edda Snorra Sturlusonar*. København 1931.

Anne Holtsmark og Jón Helgason (utg.): *Snorri Sturluson: Edda*. Gylfaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál. 2. utg. Oslo etc. 1968.

Árni Björnsson (ed.): *Snorra Edda*. Reykjavík 1975.

Elias Wessén (utg.): *Snorri Sturluson: Ynglingasaga*. Stockholm etc. 1964.

Finnur Jónsson (udg.): *Den norsk-islandske skjaldedigtning*. I A, B. København 1912.

J. Olrik & H. Ræder (ed.): *Saxonis Gesta Danorum*. Hauniae 1931.

- (1) Cf. *Saxonis Gesta Danorum*, Præfatio I 6.
- (2) 例えば, Politikens *Dansk litteratur historie*. Bind 1. Af F. J. Billeskov Jansen. Ny udvidet udgave. København 1976; Kurt Johannesson: *Saxo Grammaticus. Komposition och världsbild i Gesta Danorum*. Stockholm 1978.
- (3) ノルウェーを加えるのは, エッダ諸詩の成立にノルウェー人もかかわっていたと推測されるからである。
- (4) アングロ・サクソン英国初期の王朝系譜の一部に Baldæg の名が見出されるといふ, cf. H. R. Ellis Davidson: *Gods and Myths of Northern Europe*. Harmondsworth 1964, 183.
- (5) Anne Holtsmark: *Edda, den yngre. Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder* III (København, Helsingfors, Reykjavík, Oslo, Malmö 1958), 478.
- (6) 「まどわし, 眩惑」(ginning, praestigium) はほかにも, *Edda*, Gylfaginning

45—47, *Gesta Danorum*, Liber tertius II 4 などでも利用されている結構。

- (7) エッダ神話資料の範囲内では、オージンとリンドの結びつき方ははっきりしない (cf. Baldrs draumar 11, Gylfaginning 30)。しかし、960年頃の成立とされるスカールド詩の1行 “seið Yggr til Rindar” (Kormákr Ögmundarson: Sigurðardrápa 3) 「ユグ (オージン) はリンドにセイズ魔法をかけた」がサクソ異版との関連で解釈されうるならば、詩人はオージンをフェアな恋人と見なしてはいなかったろう。
- (8) Folke Ström: *Nordisk hedendom*. 2 uppl. Göteborg 1967, 141. (拙訳『古代北欧の宗教と神話』人文書院1982年, 158ページ。)
- (9) Axel Olrik: *Kilderne til Saks Oldhistorie* I. København 1892, 25ff.
- (10) Georges Dumézil: *Loki*. Darmstadt 1959, 101.
- (11) とりわけ, Hilda Ellis Davidson: *Saxo Grammaticus. The History of the Danes*. Books I—IX. Volume II. Commentary (Cambridge & New Jersey 1980) に具体的な指摘, 注記が多数見出される。なお, 上記注2の Billeskov Jansen (p. 76) はアイスランド人の貢献にいささかの疑いももっていない。
- (12) Anne Holtsmark: *Studier i Snorres mytologi*. Oslo 1964, 65—68, 72—76.
- (13) 「戦士」のケンニングに彼の名が現れている: “brynju Hǫðr” 「鎖帷子のホズ」 (Egill Skallagrímsson: Lausavísur 12, c. 925), “H. hjalmgrands” 「甲を傷つける者 (剣) のホズ」 (Hallfreðr Óttarsson: Lausavísur 17, 10世紀末)。
- (14) 「戦士」のケンニングにしばしばバルドルの名が含まれている。例えば, “Baldr hjarar” 「刀のバルドル」, “B. atgeirs” 「槍のバルドル」, “B. sárlinns” 「傷の蛇 (剣) のバルドル」, “B. Bólverks þings” 「ボルヴェルク (戦神 オージン) の集会 (戦闘) のバルドル」。さらに詳しくは, Finnur Jónsson: *Lexicon poeticum antiquæ linguae Septentrionalis. Ordbog over det norsk-islandske skjaldesprog*. 2. udg. (København 1931), s.v. “Baldr”。
- (15) サクソが教会の学校教育を受けたことは疑問の余地のないところであるが、彼が実際に聖職者の任務についていたかについては議論がある。